

イースターおめでとうございます。2月14日から始まった大齋節が昨日で終わり、今日は礼拝堂に花を飾って、クリスマスと同様に、今日は教会の大きなお祝いの礼拝です。

しかし、イースターで、何がおめでたいのか、改めて考えることにしたいと思います。

今日の福音書には、復活したイエス様は登場しません。ちょっと不思議なお話になっています。マルコによる福音書は、16章20節で終わりですが、9節から20節までは、後の時代に書き加えられた部分です。最初に書かれた時は、今日の福音書の所で終わっていたのです。

どんな話だったのでしょうか？

イエス様が亡くなったのは、金曜日の午後でした。日没になると安息日が始まります。安息日には、仕事をしてはいけないので、ひそかに弟子になっていたアリマタヤのヨセフという人が、急いで自分の作った墓にイエス様の遺体を安置しました。それから、丸一日、土曜日の日没までは、みんなひっそり安息日を守っていたのです。日没になると、買い物に出かけることはできますから、女性のお弟子さんたちは、イエス様の体に塗る、香料を買うために出かけました。しかし、外は暗いので、お墓に行って、香料を塗るのは日曜日の朝まで待ったのです。

そして、夜が明けて墓に行ってみると、入り口を塞いでいた石が転がしてあって、中には、白い長い衣を着た若者がいるだけです。墓は空っぽ。そして、「イエス様は復活されて、先にガリラヤに行かれたから、そこでお目にかかれる」と告げたのです。

若者の言葉を聞いて、婦人たちは逃げ去ります。最後の8節を読んでみますと。

『婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。』

どうして、こんな「恐ろしかったからである」という表現で終わっているのか、わからないのですが、この福音書が一番最初に書かれたイエス様の生涯を描いた福音書です。他の福音書の、イエス様がマグダラのマリヤなどに現れたり、エマオという村へ行く途中の弟子たちと一緒に歩いて行った話より、歴史的には脚色が少ない、イエス様の復活に出会った弟子たちの気持ちを率直に表している表現だろう、とされています。

でも、女性の弟子たちは、何が恐ろしくて、逃げ去ったのでしょうか。

男の弟子たちは、イエス様の十字架刑で、「もしかしたら自分たちもその仲間だった」ということで、殺されるかもしれない、と恐れて、木曜日の夜から金曜日にかけて逃げ去ったのですが、女性たちは留まって、金曜日の午後、イエス様の遺体が墓に安置されるまで、見届けましたし、日曜日の朝も、墓まででかけます。

ところが、若者の言葉を聞いて、イエス様の遺体を納めた場所を見たけど、空っぽだった。でも、それだけのことで、「震え上がり、正気を失って」しまうのか、そこから逃げ出すようなことなのか。イエス様が殺されるのを見ていた女性たちを動転させたのは、何だったのでしょうか？

その謎を解く鍵は、若者の言った、「あの方は復活なさって、ここにはおられない。」特に「復活」という言葉に隠されていると思います。

当時のユダヤ人には「死者の復活」という考えがありました。

マルコによる福音書が書かれたのは、紀元65年頃だと言われています。それよりも早い時代に書かれた新約聖書は、パウロが書いた手紙です。

パウロは、コリントの信徒への手紙一の15章で、こんなことを書いています。

#### ◆死者の復活

15:12 キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。 15:13 死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです。 15:14 そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。

『「死者の復活」がなければ、キリストも復活しなかったはずです。』とパウロは言いました。イエス様の時代より1000年くらい前の、国が独立国だった古代のイスラエルでは、人間が死んだらどうなるか、ということは、それほど深刻な問題ではなかったようです。人が死ぬと、「先祖の列に加えられる」とか「先祖と共に眠りにつく」というふうに、漠然と考えられていたようです。

ところが、時代が下って、国が滅ぼされたり、神様を敬う信仰者が落ちぶれ、神様に逆らう不信仰な者たちが栄える、という不条理なものを経験するようになって、イスラエルの人々の中には、人が死ぬと「死者の国」に下って、そこで終わりの時のさばきを待つ、という信仰が育っていったのです。そして『死者の復活』という思想が発展して、終わりの時には、神様が天地を新しくして、その時に死者の国で待っていたすべての死者が復活して神の裁きの前に立つ、というように信じられていきました。

この「死者の復活」という教えによって、外国の支配下で苦しんでいるイスラエルの人々に希望を与えていったのです。

そして、パウロは、先ほどの手紙の続きで、

『死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかったはずです。 15:17 そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります。 15:18 そうだとすると、キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまったわけです。 15:19 この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です。 15:20 しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。』と書いています。

パウロは、当時のユダヤ人たちが、不幸な死に方をして今は「死者の国」に居て終わりの時の復活を期待して待っていること。そんな信仰あつい人々の希望のシンボルとなって、今やイエス様が復活されたんだ、と言っているのです。

ところが、イエス様の死を目の当たりにした弟子たちにとっては、今まで、実際にイエス様の墓が空っぽであったことは、自分たちが見たこともない、予想もしないような恐ろしい出来事としか、考えられなかったというわけです。どうしてでしょうか？

イギリスの作家であり、神学者のC. S. ルイスは、彼の著書「詩篇を考える」という本の中で、聖書に出てくる詩編作家たちの、裁きについての語り口に驚いたと言っています。

『古代ユダヤ人は、私ども同様、神の裁きを地上の法廷の形でとらえている。違うのは、キリスト者はその審理が刑事事件として、自分は被告席にはいって執り行われるものと考えてるが、ユダヤ人は、自分が原告になる民事裁判として考えるのである。一方は免訴を、というよりは恩赦を願うが、他方はしたたかに相手を痛めつけるような勝訴を願うのである。』

こんなことを書いています。

苦難の歴史を生きてきたユダヤ人は、不幸なままで亡くなった人々が、もう一度復活して命が与えられることを歓迎して、自分たちの復権ということを考えていたのです。そして彼らにとっては、イエスという人物については、特に関心がなかったでしょう。

ところが、イエス様の弟子たちは、女性も含めてイエス様の無残な死に方を見ることで、がっかりしていたのに、そのイエス様が復活した、と聞けば、裏切った自分たちのことを責められるのではないか、イエス様が裁判長で、自分たちは被告席に立たされる、という思いから、「震え上がり、正気を失って」しまったのではないか。彼らは、他のユダヤ人のように復活を喜ぶのではなく、イエス様から、自分達の裏切りのことを責められる、それが恐ろしかったのではないか、と思うのです。

マルコによる福音書はそれで終わっていますが、弟子たちはやがて、イエス様のやさしい言葉を思い出し、イエス様が天国への道を開き、罪ある自分たちを裁くのではなく、温かく迎え入れて下さる救い主であった、ということに気付いてゆきます。そのことによって、彼らの中に、本当にイエス様が復活された、ということでしょう。

詩篇を読む時、ユダヤ人たちは自分たちを被告席ではなく、原告の立場で唱えるわけですが、キリスト者である私たちは、被告席から釈放されて、喜んで社会の中で生かされるようになった、私たちを釈放したイエス様に感謝して歩みたい。それがイースターを迎える私たちの喜びだと思います。